名古屋女子大学　紀要　66（人・社）225～237　2020

保育実習指導のあり方
―事後指導における評価と振り返りに関する考察―

平澤　節子

A Study on the Guidance of Childcare Practice
―Consideration of Evaluation and Reflection―

Setsuko HIRASAWA

抄　録

保育者養成校における実習指導は、保育実習（保育所、施設）、教育実習とともに、その学修の要となるものである。校外実習に際しては、学内で事前指導と事後指導からなる実習指導を行い、実習にむけた準備とまとめを行っている。本研究では事後指導における評価と振り返りに焦点を当て、自己の課題を明確化するための方法について考察した。2018年度の保育実習指導２では、事後指導時に自己評価表への記入を通して、実習の振り返りを図った。この評価表は保育実習（保育所、施設）で用いられているもので、実習園へ依頼している実習評価表と同一の書式である。評価表はABCDの４段階からなる総合評価のほか、実習態度や保育技術、記録、コミュニケーションなど14項目について評価する内容となっている。これらについて自己評価と実習園からの評価とを比較し、学生の自己課題の把握状況について分析した。その結果、自己評価より実習評価が上回ったものが24％、下回ったものが９％、評価同一が67％という結果が得られた。評価が下回った主な項目は、積極性、子どもへの対応、自己課題の明確化であり、これらの点を改善していくための実習指導が今後の課題となった。

キーワード：保育実習指導　評価　自己評価　振り返り

１．保育者の専門性について

保育者養成校（指定保育士養成施設）では、免許の種別によって学修期間が異なるが、短期大学の２カ年で保育士資格と幼稚園教諭二種免許状を取得するためには、保育実習（３回）と教育実習（４週間）で計４回の実習を行うことになる。それぞれの実習に向けては、事前指導－実習－事後指導の流れがあり、４回の実習、つまりこの一連の流れを４回繰り返すことで、高等学校を卒業したばかりの学生が、２カ年で社会人としてまた保育者として成長し、専門性を身につけ職業人として社会に出ていくのである。４回の実習は、保育所、保育所以外の施設、幼稚園と実習先こそ異なるが、連続する流れは、カリキュラム・マネジメントとして知られるPDCAサイクルや、「反省的実践家」（省察的実践家）の理論で知られるドナルド・ショーン（Donald A.Schön　1930-1997）の考えに通じるものがある。養成校での学びは、実習に向けて目標を立て（計画）、実習を行い（実行）、実習園からの評価や自己の振り返りを行い（評価）、その課題を授業で知識・技能として補い次の実習に役立てる（改善）というPDCAのサイクルであり、実践と反省（省察）とを繰り返しながら専門性を高めていくものである。保育実習指

導に関する研究は数々あるが、佐藤（2017）は、実習後の自己評価が自己課題を自覚し、成長へと繋がっていることを述べ、金元（2018）は、振り返りや省察が、学生の主体的な学びに繋がっていることを模擬保育の実践を通して明らかにしている。これらの研究からも、事後指導における振り返りは非常に重要であり、その質を高めていくことが課題でもある。

２．保育士養成に関わる動向

保育士養成課程においては、厚生労働省の「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」に則り運用することが定められており、各養成校にて厳格に推し進められている。平成30年４月27日付け子発0427第３号厚生労働省子ども家庭局長通知により、平成15年12月９月付雇児発第1209001号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知の一部が改正され、平成31年４月１日より施行された。その中で、指定保育士養成施設指定基準の第２の５、教育課程の（１）基本的事項③には『保育所保育指針（平成29年３月31日厚生労働省告示第117号）において、「養護」の視点及び「養護と教育の一体性」が重要であるとされたことに踏まえ、指定保育士養成施設においては、これらに関する内容を個々の教科目のみではなく、養成課程を構成する教科目全体を通じて教授すべきことについて、各教員の理解を促進させること』、また保育実習実施基準については、第２の備考３の５に『指定保育士養成施設の所長は、毎学年度始めに実習施設その他の関係者と協議を行い、その学年度の保育実習計画を策定するものとし、この計画において、全体の方針、実習の段階、内容、施設別の期間、時間数、学生の数、実習前後の学習に対する指導方法、実習の記録、評価の方法等を明らかにし、指定保育士養成施設と実習施設との間で共有すること』また第３の３には『指定保育士養成施設の所長は、教員のうちから実習指導者を定め、実習に関する全般的な事項を担当させ、当該実習指導者は、他の教員と連携して実習指導を一体的に行うこと。また、実習施設においては、主任保育士又はこれに準じる物を実習指導者と定めること』、続く４には『保育実習の実施に当たっては、保育実習の目的を達成するため、指定保育士養成施設の主たる実習指導者のみに対応を委ねることのないよう、指定保育士養成施設の主たる実習指導者は、他の教員・実習施設の主たる実習指導者等とも緊密に連携し、また実習施設の主たる実習指導者は、当該実習施設内の他の保育士等とも緊密に連携すること』（下線部が改正部分）とあり、保育者養成校の学部・学科の教員を挙げて実習指導内容を熟知し指導に取り組むことが求められた。また、各教科目の教授内容に関しても、指定保育士養成施設の教授担当者が授業に当たる際に参考にすることとして、標準的事項に若干の改正が加えられた。

３．保育実習の概要

勤務する保育学科での保育実習を以下に示す。表１のとおり、保育実習１Ａは１年次２月中旬～３月上旬に実施されるため、保育実習指導１Ａは後期９月から始まる。実習後には事後指導が実施され、実習園からの評価送付を待ち、次のステップである保育実習指導２の初回などで保育実習１Ａの評価伝達を実施している。保育実習１Ｂは２年次の７月中旬～11月下旬と夏期から後期にかけて、実習施設毎に五月雨式に実習が行われている。そのため、保育実習指導１Ｂは、２年次前期に事前指導、そして全実習生終了後の12月に事後指導が行われている。保育実習２は１Ｂ同様に２年次の８月下旬～９月上旬にかけて実施されるため、保育実習指導２は２年次前期と実習終了後の後期にかけて実施されている。

また、平成30年度より保育学科では「第三部」（ワーキング・スタディコース）を新設し、

表１　実習の種別と実施時期（2018年度入学生用履修要項より）

実習の種類	実習施設	履修年次		履修時期	履修方法
		第一部	第三部		
保育実習１Ａ	保育所	１年	２年	２月中旬～３月上旬	必修（2 単位）
保育実習１Ｂ	施設	２年	３年	７月中旬～11 月下旬	必修（2 単位）
保育実習２	保育所	２年	３年	８月下旬～９月上旬	選択必修（2 単位）

午前中の授業を中心に３カ年で第一部同様に、保育士資格、幼稚園教諭二種免許状が取得できるカリキュラムが始まった。１年次は保育・教育の原理や保育内容演習などの基礎を学ぶため、実習に関しては２年次つまり第一部の１年遅れの同時期に、同種別の実習が実施されることとなっている。尚、教育実習に関しては、本学科では２年次５月中旬～６月中旬にかけて４週間行われている。昨年度入学した第三部学生は現在２年生につき、2019年後期より実習指導が始まったところである。

（１）保育実習指導１Ａの内容

保育実習指導１Ａは保育実習１Ａの事前・事後指導として行われる。この実習は新入生が初めて取り組むものになるため、実習指導では、保育所の役割と機能、保育者の職務内容といった基本事項の理解から始まる。それと並行して、実習に向けた実習目標、個人表、訪問指導教員に提出する実習園への経路や地図など実習手続きに関する書類の作成を行い、提出に関しては期日厳守を徹底している。特に授業の初回では、実習指導に臨む心構えとして、欠席・遅刻時の対応、提出物に関する事項など、受講上の注意点を伝え、事前指導を通じて、実習に向けた知識・技能の習得のみならず、保育者・社会人としての基本的な態度が身につき、事務手続きが学生自身で行えるよう指導を行っている。保育実習１Ａは観察、参加実習が主になるが、手遊びや絵本・紙芝居の読み聞かせなど小規模の部分実習も含まれるため、対象年齢にあった教材の選び方を学ぶための発育発達の理解や、対象年齢にあった指導法の研究や指導計画について学んでいる。また保育表現力を身につけるために、手遊びや自己紹介の練習や発表を行っている。そして実習時には訪問指導教員が実習園長や担当者らと面談し、実習の進捗状況や学生の困りごとへの対応など現地指導の機会としている。実習後は事後指導として、振り返りシートへの記入を通して実習を総括し、次の実習に向けた自己課題の明確化を図っている。詳細は表２の2018年度保育実習指導１Ａ授業計画のとおりである。尚、平成30年度は、担当した３名の教員が、それぞれの前任校にて実習指導経験があり、実習指導方法の共有また改善など、現任校に合った指導内容と方法について検討を重ねながら進めることができた。これも保育実習実施基準にて改定された「他の教員と連携して実習指導を一体的に行う」ことができた一例ではなかろうか。

表２　2018年度 保育実習指導１Ａ 授業計画

授業の目的と概要	保育実習１Ａ（保育所）の事前・事後指導を行う。実習を充実した体験にするために、保育所の役割・機能、実習の目的・内容・方法、子どもの最善の利益やプライバシーの保護といった保育倫理などについて理解すること、保育実習への準備を整えることを目的とする。既習の教科全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する基礎能力を養う。手引や配布資料、映像資料を活用しながら実習の流れや内容を把握していく。また課題提出や実習園との電話連絡や訪問による実践等を通じて、実習生、社会人として行動できるようにする。
授業の到達目標	・実習に関する事務手続きが適切にできる。 ・実習の意義・内容を理解し、自ら積極的に課題に取り組むことができる。 ・保育の指導・援助について計画を立案することができる。 ・実習における観察の視点を理解し、記録にまとめることができる。 ・実習生や社会人としての基本的な態度を身につけることができる。 ・実習の自己課題を明確に持つことができる。
授業計画	1、実習の意義と目的 2、保育所の機能と役割・保育者の仕事 3、基本的生活態度やマナーについて 4、実習の目標設定・実習園に提出する書類作成 5、実習記録－各様式の説明と記入例 6、記録の書き方（1）意義と実習のねらい 7、記録の書き方（2）子ども理解について 8、記録の書き方（3）環境構成・保育者の援助について 9、記録の書き方（4）乳児について 10、実習園への事前訪問について 11、指導案の立案・作成（1）保育過程と指導計画および作成について 12、指導案の立案・作成（2）指導案作成と実践 13、指導案の立案・作成（3）乳児について 14、直前指導－心構え・提出物の説明 15、事後指導－自己評価・振り返り・自己課題の明確化

（２）保育実習指導２の内容

保育実習指導２は保育実習１Ａ完了後、保育実習２の事前・事後指導として行われる。平成30年度前期に開講した保育実習指導２は、筆者が指導主担当を行い、ほか２名の専任教員の計３名にて指導を行った、それぞれの専門分野を活かし、授業内容に応じて分担し、指導の効率化を図った。保育実習２は保育実習１Ａをふまえて、参加実習から部分実習、そして登園から降園または午睡前までの保育を担任に替わって指導させていただく全日実習へと、より発展かつ実践的な内容になる。日々の記録に加え、部分実習の指導案、より規模の大きい主活動時の

指導案、そして全日実習にむけた日案など、指導計画の立案、作成が不可欠となってくる。そのため事前指導でも、園児の年齢に応じて、低年齢児、３歳児、５歳児などと発育発達の異なる年齢に応じた考え方ができるよう、それぞれの段階を対象とした教材研究と指導計画の立て方に取り組んだ。また指導案を書くだけの指導ではなく、それをいかに実践に移せるかを考えるために、「集団への指導を学ぶ」と題して、１クラス（45名程度）を小グループに分け、保育者役と設定した年齢の子ども役とに分かれ、クラスメイトを子どもに見立てながら、模擬保育を行った。終了後は自己評価と共にグループ毎に振り返りを行い、活動の進め方、声の大きさや顔の表情、設定年齢の子どもが理解しやすい説明であったかなど、互いに助言を行いながら、保育内容や自身の援助技術を客観的に捉えるアクティブ・ラーニングを実施した。尚、模擬保育ではあえて全学生が共通の題材を指導内容（活動名『七夕飾り（菱飾り）をつくろう』、対象：４歳児）とし、学生が互いの説明方法や活動の進め方などを比較・検討できるように進めた。事前指導では、指導案を書くことに専念してしまいがちであるが、指導案を立案後、どのように働きかけるかが重要であると考えたため、２年次の事前指導では学生各々のプレゼンテーション・スキルの向上を目指し、このような指導を実施した。この活動を通して、学生が保育者としてどのように立ち振る舞えば良いかを考え、クラスメイトの保育者としての姿を見ることで、自身の姿を省察できる機会とした。実習終了後は、保育実習指導１Ａと同様に振り返りシート記入による実習の総括と、自己課題を明確にし、残りの半年間で何を習得すべきかを考える時間としている。また、保育実習２の内容を四つ切り画用紙１枚にまとめたポートフォリオ（図１）を作成し、クラス内で実習報告を行うほか、保育実習指導１Ａを開始したばかりの１年生を対象に保育実習報告会を実施している（図２）。

図１　ポートフォリオ

図２　実習報告会の様子

そこでは代表学生が保育実習指導の流れや実習先での保育活動、年齢による保育者の援助の違いなど、それぞれのテーマをスライドにまとめ、パワーポイントによるプレゼンテーションと、事後指導で作成したポートフォリオ発表などを行い、２年生が後輩に保育実習について伝える場としている。2018年度に実施した保育実習指導２の授業計画を表３に示す。

表３　2018年度 保育実習指導２授業計画

授業の目的と概要	保育実習２（保育所）の事前・事後指導を行う。保育実習１Ａで学んだことを踏まえ、保育所の機能や役割について理解を深め、保育者としての資質や能力、技術を向上させる。既習の学習や実習を通しての学びを総括し、保育における課題や自己課題を明確にする。
授業の到達目標	・実習園について地域環境や保育指針など特色を理解して実習に臨む。 ・実習の自己課題を明確に持つことができる。 ・実習の内容を理解する。 ・保育の指導・援助について指導案を立案し、実践する事ができる。 ・保育者の専門性について理解する。
授業計画	1、保育実習２の意義と目的 2、自己課題の明確化と目標設定 3、実習園への提出書類作成 4、保育過程・指導計画について 5、保育士の専門性と職業倫理について 6、発達や子どもの状況に応じた教材研究（1）乳児について 7、指導案作成（1）乳児について 8、発達や子どもの状況に応じた教材研究（2）３歳児 9、指導案作成（2）３歳児 10、発達や子どもの状況に応じた教材研究（3）５歳児 11、指導案作成（3）５歳児 12、直前指導　心構え・細菌検査・提出物の説明 13、事後指導　自己評価と実習報告会について 14、実習報告会の準備 15、実習報告会と自己課題の明確化、保育者の専門性の理解

（３）実習後の評価について

実習の事後指導では振り返りシートと、実習園に依頼した評価表と同一のものを自己評価表として用いて、評価伝達時に実習園からの評価（以後、実習評価）と自己評価を照らし合わせ、自己を客観的に見つめ、課題を明確化できるよう面談を行っている。評価項目は、「態度」と「知識・技能」の大きく２項目に分けられ、「態度」については「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」の４つの小項目に、「知識・技能」については「保育技術の展開」、「一人一人の子どもへの対応」、「子どもの最善の利益」、「指導計画立案と実施」、「記録」、「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」、「チームワークの実践」、「保育士の職業倫理」、「自己課題の明確化」の10の小項目に分けられている。総合評価はABCDの４段階評価でつけられ、その基準は、Ａ「十分達成している」、Ｂ「概ね達成している」、Ｃ「一層の努力が必要」、Ｄ「問題がある」とし、Ｃ以上を単位認定としている。評価は、上記の14項目による詳細な評価と、４段階による総合評価でつけられ、実習園の園長又は指導担当者からのコメントが記述できる

ようになっている。尚、実習の成績については、実習評価をもとに、実習記録の提出と内容、実習状況などを総合的に判断している。

４．自己課題を明確化するために

事後指導では、実習評価を実習担当教員が学生一人ひとりに面談方式で伝える時間を設けている。実習園からの総合評価をそのまま伝えるのではなく、学生が記入した自己評価表と、実習評価表において、評価が良好な項目と、課題となる項目について学生自身が認識できているか否かを判断し、実習中のエピソードを聞き取りながら、自身の課題に気づくことができるような働きかけを行っている。その中で、自己評価の厳しい学生や自己肯定感の低い学生、または自己満足感や自己肯定感の高い学生など､学生一人ひとりによって評価基準が大きく異なる。これは実習評価においても、全体的に評価が高い園と厳しい傾向にある園など、同様のことがいえるのであるが、学生の自己評価と園からみた実習評価において、どの程度の差があるか分析を行い、実習後の評価伝達や振り返りをとおして自己課題を明確にさせていくための方法を探っていきたい。

（１）研究方法

平成30年度の保育実習指導２事後指導は３回行われた。研究は、第１回目に実施した自己評価表の記述内容と実習園からの評価表との内容を比較した｡研究に際しては倫理的配慮として、研究の趣旨目的を説明し、個人は特定されず、論文や研究発表など学術目的以外には使用しないことを伝えたうえで、同意を得られた学生のデータを使用した。以後の結果は、対象者128名のうち同意を得られた123名のデータによるものである。

（２）総合評価の結果と分析

まず総合評価について、実習評価を図３、自己評価を図４に記した。実習評価は、Ａの「十分達している」が全体の20％、Ｂの「概ね達している」が68％、Ｃの「一層の努力が必要」が12％、Ｄの「問題ある」は０％と、Ｂ評価が最も多かった。自己評価に関しては、Ａが２％、Ｂが86％、Ｃが12％、Ｄが０％と、Ａ評価は実習評価の20ポイントと比べてポイントが低く、Ｂ評価は逆に実習園からのポイントを大きく上回った。Ｃ評価に関しては、ともに全体の12％、Ｄ評価は０％という結果であった。Ａ評価に関しては、自己評価においては過小評価したとも考えられるが、実習生として現場の保育者らの言動と比較しながら、まだ自身で保育に対する自信や確信が持てずにいることの表れではないかと考えられる。その結果、自己評価のＢが、実習評価を上回っているのではないだろうか。実

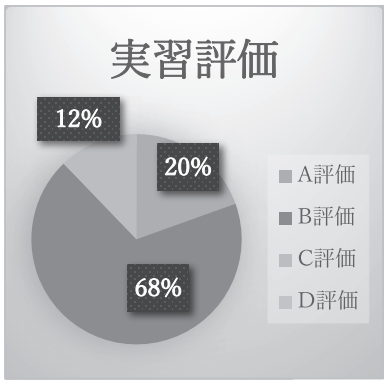

図３　実習評価

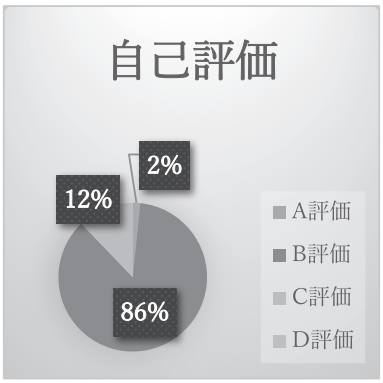

図４　自己評価

習生全体の86％ものが、自身の実習を振り返った時に「概ね達成」できたと評価していることは、実習担当としても喜ばしいことではあるが、Ａ評価をつけられる実習ができるよう実習指導内容、実習環境、実習園と養成校との連携・信頼関係の充実が課題といえる。

（３）自己評価との比較と分析

次に、総合評価における、自己評価と実習評価とを比較し、図５にまとめた。自己評価に比べ、実習評価が上がった学生は24％（29名）、それに対して評価が下がった学生は９％（11名）、評価が同じ学生は67％（123名）となった。評価が上がった学生の内訳は、Ｂ評価からＡ評価になった者が20名、Ｃ評価からＢ評価が８名、Ｃ評価からＡ評価になった者が１名であった。一方、自己評価より実習評価が下がった学生の内訳は、Ａ評価がＢ評価になった者が２名、Ｂ評価がＣ評価になった者が９名であった。自己評価も実習評価も同じが67％あった。自己評価も実習評価もともにＢ評価117名という結果は、概ね実習基準を充たしているという意味では良好な結果と言える。一方で、実習園からも自身でもＣ評価というものが６名であった。２年生の保育実習という意味では、少なくとも自身ではＢ評価がつけられるよう、知識・技能そして実習態度の更なる向上が求められる。また、自己評価、実習評価ともにＡ評価であった学生は０名で、質的にも満足度的にも高評価をつけた学生がいなかったことが驚きであった。自己評価のＣを減らし、Ａを増やしていく実習指導が今後の課題といえよう。

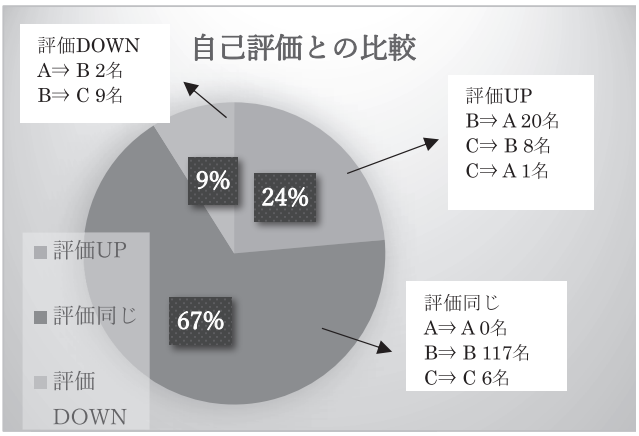

図５　自己評価と実習評価との比較

（４）評価表項目による比較と分析

評価表は総合評価のほか、「態度」、「知識・技能」の内容を細分化した14の項目がある。「態度」の項目には、意欲・積極性、責任感、探求心、協調性、「知識・技能」の項目には保育技術の展開、一人一人の子どもへの対応、子どもの最善の利益、指導計画立案と実施、記録、保護者とのかかわり、地域社会との連携、チームワークの実践、保育士の職業倫理がある。意欲・積極性といった基本的態度をはじめ、保育技術や子どもへの対応力、指導計画立案と実施などの保育実践力、保育者としてのチームワークや職業倫理など、総合的に実習を評価するものとなっている。実習評価と自己評価とを比較し、どの項目において学生と実習園との評価に差が生じたのかを明らかにするため、全体的な実習評価が自己評価を上回ったグループと下回ったグループとに分け、その中で評価が上回った項目を図６に、評価が下回った項目を図７にまとめた。

図６は、自己評価が実習評価を上回った学生29名分の項目である。そのうちおよそ半数となる14ポイント以上の項目を取りあげると、「探求心」、「協調性」、「保育技術」、「計画立案と実践」、「保護者とのかかわり」、「地域社会とのかかわり」、「保育士の職業倫理」、「自己課題の明確化」の９項目であった。そのうち特にポイントの高かった「探求心」、「保育技術」、「地域とのかか

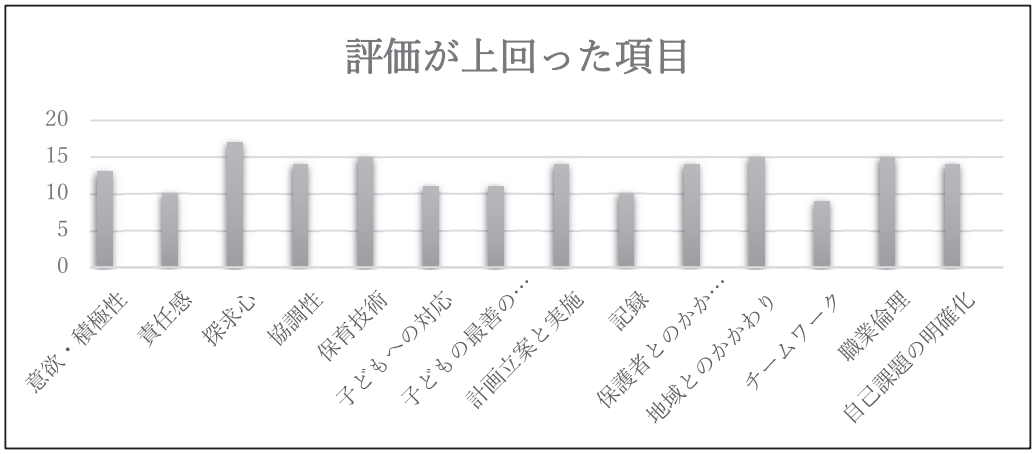

図６　実習評価と自己評価との比較（評価が上回った項目）

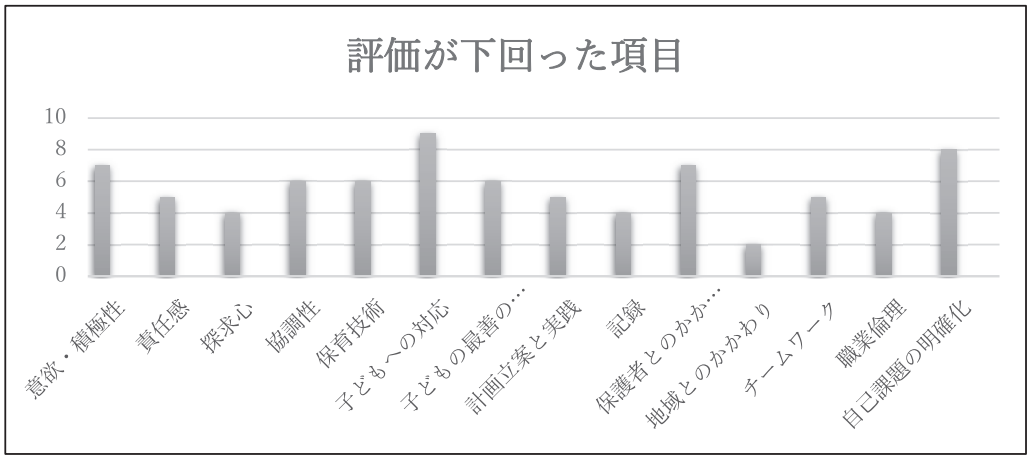

図７　実習評価と自己評価との比較（評価が下回った項目）

わり」について、それぞれの項目に書かれた学生の自由記述によるコメントと、実習園からの評価理由に関するコメント、総合欄の内容を原文のまま、以下にまとめる。なお、〇学は学生のコメント、〇園は実習園からのコメントである。

【探求心】
㊥先生の姿を見ながら、なぜそのように行動したかを考えた。
㊦自分で考えて実践しようとすることが多く見られた。
【保育技術】
㊥子どもの遊びから発展し、子どもと一緒に、さらに楽しめるように工夫した。
㊦子どもの遊びに自然に溶け込み、一緒に遊んでくれたことで、子どもの生活がより豊かになった。
【地域とのかかわり】
㊥近くにある神社に行き、地域の方と関わることができ、地域と保育所の連携の様子を見ることができた。
㊦以前から子育て支援センターのアルバイトや発表会のお手伝いで、地域や子どもたちと関わってもらっていた。
【学生の総合欄】

・指導案の作成は、一つの指導目標にいくつかの計画を立て、子どもの様子に合わせて適宜変えていく保育を行う必要があると思いました。
・来年からはたくさんの保護者の方や地域の方と関わることになるため、コミュニケーションの方法を学んだり、子育て支援のニーズを理解して地域における保育所の役割について学びたいと思います。
・保育技術について、保育者の姿から学ぼうと努めたが、もっと習得することがある。
・当たり前のことはできているが、一歩踏み込んだ部分をもっと積極的に学び、理解する点が実習では足りなかった。

記述内容から、自己評価より実習評価のほうが高評価を得ていても、自己に厳しく、問題意識が高く、自己課題が客観的に捉えられている記述が多く見られた。学生の総合欄の記述を見ても、現状に満足することなく、向上心の高さがうかがわれる。

一方の図７は、自己評価が実習評価を下回った学生11名分の評価内容である。このうちおよそ半数となる５ポイント以上のものをあげると、「意欲・積極性」、「責任感」、「協調性」、「保育技術」、「子どもへの対応」、「子どもの最善の利益」、「計画立案と実施」、「保護者とのかかわり」、「チームワーク」、「自己課題の明確化」の10項目あった。そのうち特にポイントの高かった「意欲・積極性」、「子どもへの関わり」、「自己課題の明確化」の評価について、こちらも同様に、項目ごとに学生のコメントと実習園からのコメント、総合欄の内容を原文のまま、以下にまとめる。

【意欲・積極性】
㊐日が経つにつれて、子どもたちと積極的に関わることができた。
㊀はじめの一週間はほとんど感じられなかったが、２週目は努力を感じた。もっとできると感じる。
【子どもへの対応】
㊐月齢によって成長過程が違い、保育者の援助や配慮が違うことが分かった。
㊀理解しようという姿勢は感じられず、聞いたり尋ねたりすることもなかった。
【自己課題の明確化】
㊐自分の課題を見つけられた。
㊀繰り返しの説明、指導にもかかわらず、自分の課題に気付くことがなかった。
【学生の総合欄】
・私は探求心が特に足りないと思いました。「○○の時はどうしたら良いか」と常に考えて行動していくことが大切だと思いました。
・部分実習の時など、もっと準備を多くする必要があった。予測できたこともあったので、もう少し先生方に質問させていただくべきであった。
・私は探求心がないと思いました。分からないことがあっても自分の中で考えて、自己完結してしまうことが多く、質問することが多くなかったので、たくさんの意見を聞いていきたいと思います。
・子どもへの対応で、保育者に指示を出してもらって動いていたため、自分で考えて行動できるようになりたいです。

評価が下回ったグループでは、自己評価と実習評価の認識に大きなずれが見られた。現場で働く保育者との相対的な比較ではなく、主観に基づき、自己肯定感の高い評価がなされ、自身の姿を客観的に捉えられていないかのように見られる。しかし､学生の総合欄の記述を見ると、実習評価が低かった「探求心」について課題を挙げる学生が多く、自己評価の過程が省察となり、自身の課題にたどりつく結果となったようである。

（5）考察

本研究では、事後指導時の自己評価について、実習の総合評価の集計と実習評価と自己評価との比較、評価項目による比較と分析を行った。その結果、総合評価のＡ評価数は自己評価よ

り実習評価の方が多く、Ｂ評価数は実習評価より自己評価の方が多かった。これは、自己評価よりも実習評価の方が上回った学生からの記述にもあったように、「当たり前のことはできているが、一歩踏み込んだ部分をもっと積極的に学び、理解する点が実習では足りなかった」と、現状に満足せず、保育技術や知識を更に身につけたいとする思いの表れと考えることができる。したがってこの層のポイントが、自己評価のＢ評価数に加わり反映された結果となっている。実習評価と自己評価の比較においては、自己評価よりも実習評価の方が上回ったものが全体の約25％、下回ったものが全体の約10％、それ以外は評価が同じ、という結果が出た。前述のとおり、評価が上回ったものが多いのは良好な結果であるが、実習指導の課題としては、評価が下がった項目についてはその内容を実習指導に反映していくことが重要である。これについては、評価表項目による比較と分析により、その項目が明らかになった。下回った項目は「意欲・積極性」、「子どもへの関わり」、「自己課題の明確化」の３項目であり、これが以後の実習指導の課題といえよう。「意欲・積極性」と「子どもへの関わり」については、個人の性質によるものが多く、学内の事前指導で養うには限界があるが「自己課題の明確化」については、実習評価が自己評価を下回った層の記述からも確認できたとおり、自己省察する過程の中で、自己課題を明確にできた学生が多い。保育者は、保育士という国家資格を有した専門職（専門家）である。ショーンの理論のとおり、「専門家は自身の行為を省察し、行為の中から知識を得る」という一連のサイクルが専門性を習熟させ、専門家とは常に省察し続ける存在であるという考えが、保育者にも求められる姿なのである。このサイクルを継続して回すことにより、知識や技術が深化する。そのためには、常日頃より自己を省察する能力や習慣を身につけておく必要がある。例えば、15回の実習指導の中間期に一度自己評価を実施し、これまでの学びを振り返り、習得できていない課題を見つめ、以後の授業に反映させることも、自己省察の一つである。ルーブリック評価を活用するのも有効な手段である。また、２週間の実習期間中、第１週目が終わった時点で、実習園の指導担当者と学生とで中間反省会等を実施し、実習目標の達成具合を確認したり課題点を明らかにしたりすることで、実習中に一度自己省察の機会を作り、自己課題を明確化することで、第２週目にはより質的の高い実習を行う事ができるのではないかと考えるのである。

おわりに

保育実習の前後に実施される実習指導（事前・事後指導）は、とかく事前の指導に費やされることが多いが、今回の研究で「自己課題を明確化」するために、事後指導の中で自己省察することが重要であることが確認できた。自身の指導のなかでも、事後指導時に実施した振り返りシートや自己評価表を「自己課題の明確化」に活かしきれていないと感じることが多い。ショーン（2001）は、行為の中の省察（reflecting in action）について、「行為の中の省察の大半が、驚きの経験とつながっている。直観的で無意識的な行為は、予想した結果以上のものを生み出していない時には、特にそれについて考えようとはしていない。しかし、直観的な行為が驚きや喜び、希望や思いもかけないことへと導くとき、私たちは行為の中で省察することによってそれに応える」と述べている。この、行為の中というのが、保育者養成でいえば実習であり日常の学びでもある。実習において主体的で生き生きとした体験が質の高い自己省察につながり、高い専門性の獲得と自己課題の明確化になるのである。そのため、実習後の省察の過程をより重視し、そこから抽出した課題を次の実習等へ繋げる連続性を持たせた実習指導が、今後の課題である。

参考・引用文献

・佐藤達全（2017）「「保育実習指導」で見えてきた保育課学生の問題点の保育者育成－基本的な生活習慣と学習に対する意識を中心に－」『育英短期大学研究紀要』第34号 pp.69-82.
・金元あゆみ（2018）「学生の専門的成長を支える保育実習指導のあり方」子ども教育研究臨時増刊号 pp.22-39.
・平成30年４月27日付け子発0427第３号厚生労働省子ども家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正について
・ドナルド.A.ショーン（2001）専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える 佐藤学、秋田喜代美訳 ゆみる出版 p.91

参考資料　保育実習評価表

保育実習２（保育所）評価票

大学名	学科	学年	組	学籍番号	実習生氏名
名古屋女子大学短期大学部	保育学科				

実習園名	園長名	実習指導者名
	印	印

評価項目		評価《該当するものを○で囲む》 十分達成している	概ね達成している	一層の努力を要する	問題がある	評価の理由
態度	意欲・積極性	A	B	C	D	
	責任感	A	B	C	D	
	探究心	A	B	C	D	
	協調性	A	B	C	D	
知識・技能	保育技術の展開	A	B	C	D	
	一人一人の子どもへの対応	A	B	C	D	
	子どもの最善の利益	A	B	C	D	
	指導計画立案と実施	A	B	C	D	
	記録	A	B	C	D	
	保護者とのかかわり	A	B	C	D	
	地域社会との連携	A	B	C	D	
	チームワークの実践	A	B	C	D	
	保育士の職業倫理	A	B	C	D	
	自己課題の明確化	A	B	C	D	

総合評価	十分達成している	概ね達成している	一層の努力を要する	問題がある
	A	B	C	D

保育実践者から観た実習生の課題と総合所見

実習期間	出勤日数	欠勤日数	遅刻日数	早退日数
年　月　日（　）～　月　日（　）				